

木下中学校 宅配部

川居 静花

「はあ。それで、僕たちに運んでほしいと」「そうなんだよ」

放課後の第三準備室、もとい、「宅配部」の部室。

そこには、二人の男子生徒と一人の女子生徒、そして初老の男性がいた。

生徒達と男性は、ソファに座って、向かい合っている状態で話を進めている。

今回の依頼は

「写真立てを駅前のロッカー37番にいれること」

木下中学校には「宅配部」がある。

名前のとおり、平日は校内限定、休日は校外出張宅配ありの、小さな宅急便だ。

平日は校内だけなので、用事があって、自分で届けに行けない人だけしか依頼しないのだが、休日は公共交通機関も使えるし、何より、ピンポイントでの、さら

に言えば動物の宅配も可能になる。そのおかげで、部がつぶれないくらいには依頼がくるのだ。

「△△公園の友達まで、子猫を届けて」

「妹の目を私が引いているうちに、クリスマスプレゼントをバレないように靴下へ入れて」

等々。実に様々な依頼がある。

今回の依頼は、木下中学校現校長の

そのたまも園田守から。定年退職にむけて、昔、妻とくらししていた家を買取り、引っ越しの準備をしていた時のこと。

一通の手紙が届いたそうだ。

「写真立てを木下駅前ロッカー37番に入れる。鍵は、ロッカーの下におけ。できないなら、百万円用意しろ」

ふざけた内容だが、百万円用意する訳にもいかない。しかし、警察に出すほど深刻そうでもない。

写真立てくらいなら、いくらでも渡すのだが、あいにく指定された日時は引越当日だった。

そこで、こんな要求にも応えられる我が校のクラブ、「宅配部」に頼むことにしたのだ。

その話を聞いていたのは、副部长、あいはらゆつた相原悠太。その右隣の、こはやしかずゆ小林和也。そのまた右隣、唯一女生徒の泉谷春。副部长が代表で話を聞いているのは、部長が今、行方不明だからだ。

「これは、随分子供じみた文章ですな」

その手紙を手に、相原は顔をしかめた。「いたずらかもしれないけれど、やってくれるかい?」

申し訳なきように聞いてくる校長に、相原ははつきりと答えた。

「もちろん、お引き受けします」

園田校長が去った後、少ない部員で話し合いが行われた。

「宅配の指定日、誰が空いてる?」

「あっ!はいはい!私、何も用事ありません」

せん！」

勢いよく手を挙げたのは、泉谷春だった。

「おつ、じゃあ、春でいいじゃん」

小林の言葉に相原は頷いた。

「そうだな。じゃあ、頼む」

「わかりました！」

当日

午後一時

「えーっと、ここを右だよね」

泉谷は一人、駅への道を歩いていて。途中、道に迷ったり、こけそうになったが、なんとか元の道へと戻ることができた。なにしろ田舎なので、たとえ駅近くといつても細い道が何本も交わっているのだ。

そして、この細い道には案外いろんな人がいるものである。

午後一時十二分

宅配部副部長、こと相原悠太は、行方不明の部長を探していた。大体いつも駅から少し離れた公園にいたので、いかにかどうか調べにきたのだ。学校には来て

いるらしいから、サボリかなんかだろう。

(泉谷はもう着いただろうな)

目的地まではそう遠くはないはずだ。

そんなことを考えながら歩いていて、前から見慣れた顔が見慣れた自転車に乗って近づいてきた。

彼もこちらに気がついたようで、

「お！悠太〜！」

と手を振ってきた。

「こんな所で何してんだ、小林」

彼は自転車からおりると、悠太にあわせて自転車をおし始めた。

「俺は草野球の帰り！お前は？」

「部長探し」

「あの人、サボリじゃねえの？」

「多分そうだな」

足は動かしのまま、二人で部長の悪態をつく。

すると、交差点にあたったところで小林が

「あ」と声をあげて立ち止まった。

「どうした？」

相原は小林の目線の先に目を凝らして

みた。

「あ」

そこには、泉谷の姿があった。

まだ駅に着いていないということは、迷っていたのだろう。

「あいつ、一人でいけんのかな？不安になつてきた。あつ、こけた」

隣でケラケラ笑っている小林を少し見てから、その場を去ろうとすると、

「おーっと。何帰ろうとしてんだよ。部長がいない今となっては、部員の安全は副部長が見守るべきだろう？」

小林が相原の腕をガシツとつかんだ。

午後一時半

後ろの怪しい二人にも気づかないまま、やつとのことで駅に着いた泉谷は、

辺りを見回してロツカーを探す。

「あつた！」

泉谷はロツカーまで走り、37番を探す。

そして、その中に例の写真立てを無事に入れ終え、家路に着こうとした。

が、

(ロツカーに入れたはいいけど、とりに

くるのかな……。脅迫状の差出人つてど

んな人なんだろう。)

無駄に旺盛な好奇心がうずいてしまっ

た。

(ちよつと見るくらい、いいよね。うん！
バレなきゃいいんだし。宅配部なんだから、最後まで見届けないと！)

午後一時四十五分

「あいつ、なんであそこから動かないんだ？」

相原は電柱の横に張りついている泉谷を見て、小林に問いかけた。

「待つつもりなんじゃないの？」

当たり前のように言う小林に、また問いかける。

「誰を？」

「おかしな脅迫状の差出人」

……。

「は!?もし見つかったらどうするんだよ!!連れ戻せ!!」

「はいはい。大丈夫だって。あの子足速いし。まだ俺らの出番じゃないよ」

今度は、両腕をつかまれた。

抵抗を試みたが失敗に終わり、また拘束されてしまった。

それでも視線を上げて泉谷の方を見ると、

『あ、誰か来た』

相原、小林、二人同時に声を発した。

午後二時

(誰か来た!!)

ロッカーに近づいてきた足音を聞いて、こっそり目を向ける。

(足が小さい。女ののかな?)

足からたどつて、視線を上げていくと。

「えっ!」

声を発してしまったのに気づいて、すぐさま口をおさえる。しかし、相手には聞こえていたようで、彼女が振り返った瞬間目が合ってしまった。

「あなた、何？」

口を開いた彼女は、小さな小さな女の子だった。

午後二時五分

「あれが差出人? あんな小さい女の子が?」

「37番をあげようとしていたからそうなんだろう。あいつら、何か話したぞ」

見ると、二人はすぐそばのベンチに座り、仲良くおしゃべりし始めたのだ。

「こつからじゃ聞こえねえ。いつちやおうぜ」

未だに捕まっている相原には反対も賛成もできないまま、また連れていかれるのだった。

木の陰へと場所をかえ、二人の会話に耳をそばだてる。

「あの手紙の差出人は、あなたなの?」

『あや』と名乗ったその少女は頷いた。

「うん」

「新聞の切り貼りでつくられていたけど、それも自分で?」

「ううん。それは、手伝ってもらったの」

自分でも迷惑なことをしたのをわかっているのか、しゅん、と頭をたれて話している。

「今日ね、おじいちゃんの結婚記念日なの。少し前に、家族で掃除したら、死んだおばあちゃんとおじいちゃんの写真が出てきて、私、それをプレゼントしたくて」

(ん?おじいちゃん?引つ越し?それって)

「もしかして、校長先生のお孫さん!」

「うん」

今までわからなかったことが、次々と解けていく。要するに彼女にとつてあの手紙は、いたずらなんかではなく、サブライズへの余興だったわけだ。

しかし、彼女はあのかを知っているのだろうか。

「あの、あやちゃんのおじいちゃん、引越し屋さんの都合で早く出発することになったの、知ってる？」

「え？」

やはり、知らなかったようだ。依頼された日の後日、偶然廊下ですれ違った際に聞いたこと。確か、その時間は、二時半。園田校長は、朝早くから生徒に挨拶するため、学校近くに住んでいる。その家は、木下中学校の生徒ならば誰でも知っている。

だから……

「おい、和也！校長先生の家までかつ飛ばせ！」

そこまで話を聞いていた相原は、すぐさま小林にむかって叫んだ。小林は何が何だかわからず、首を傾げる。

「このままいくと、泉谷はあの子の『依頼』を引き受ける。その前に、校長先生を引き止めておけ！」

「そういうことか！了解！」

ことを理解した小林は、すぐに自転車に乗って走り去った。

それを見た後で、

(俺もできるだけ先に行っておこう)

悠太も走り出した。

「大丈夫！私に任せて！」

泉谷はあやに胸を張って言った。

「え？」

あやは、泉谷を見上げる。その目には涙がたまっていた。

「私たちはね、『宅配部』っていう、いろんなものを届ける部活をしているの。それも一緒。ちゃんと届ける。だから、私たちに依頼してみない？」

あやの顔がパアツと輝いた。勢いよく

それを差し出し、頭をさげた。

「うん！お願いします！」

それを聞いた泉谷は、につこり笑って、

「お引き受けします」

と返し、走り出した。園田校長の家まで

約二十口。

午後二時半まであと五分。

学校二位の足はぐんぐんスピードをあげていく。

周りの風景が次から次へと移り変わり、緑の木々たちはもうただの残像でしかない。

(絶対、間に合わせる！)

しかし、最初から全力で走っているせいで、エネルギーの消費もはやく、しばらくしたところで、ついにスピードが落ちてきた。

(しっかりしてよ！)

すると、自分の速さのせいで、どんどん大きくなってきた人影がこっちに手を出して、泉谷を待っている。泉谷はそれを見て、ラストスパートをかけた。

「泉谷！来い！」

「お願いしますっ！」

リレーのバトンのようにそれは渡され、選手は相原悠太へと変わった。

再び勢いを取り戻したスピード。周りの人々もその勢いにおされ、自然と道をあけている。

その道を、風を起こすようにぐんぐん走る。

すると、パンクしてしまった自転車をひきずって走っている背中が見えた。なんとも不運なその背中に向かって吠える。

「和也！パス！」

振り向いた小林は、渡されたものを見て、すぐに走り出した。

「任された！」

悠太が息を整え、また顔を上げると、もう目の前の道には誰もいなかった。

そして、バトンは学校一の足をもつ、小林和也の手の中へ。

「校長っ先生っ！」

園田守は、トラックに乗りこむところだった。しかし、その生徒を見て、動きを止めた。

「どうしたんだい？そんなに大粒の汗を流して！」

目を見開いている園田校長に、小林は必死で運んできたものを差し出した。

「これは、私が君たちに託した写真立

てじゃないか」

不思議そうにそれを見る校長の顔が突然変わった。

「この写真は……」

それを聞いて、ようやく息を整えた小林が言葉を発した。

「お孫さんが、あの手紙の差出人だったんです。今日は、おじいちゃんの結婚記念日だつて。この写真を」

すると、おじいちゃんの顔になった園

田校長が微笑んだ。

「そうか。あやが」

そして、姿勢を正して、言った。

「ありがとう。校長としても、祖父としても。また、あやのところへ遊びに行くよ」

最後にそう言って、校長はトラックへ乗りこんだ。小林はそれを最後まで見送った。

後日。

「やー。久しぶり」

……。
「部長！帰ってきたんですか！もう、どこでサボってたんです？」

今まで何もなかったところにコロッと

戻ってきた部長が、責められないはずもなく、その日は最後まで、この数日間何をしていたのか、みっちりしぼられた。

「ひどいなあ、サボってたんじゃないかって依頼を受けていたんだよ。小さな女の子の小さなプレゼントの手助けをね」

……。

再び訪れる沈黙。その中で、泉谷が口を開いた。

「それって、もしかして……、あやちゃん!」

それを聞いた部長は、これまた驚いた、というかんじで言った。

「あれ？なんで知ってるの？」

その後の話。

おじいちゃんに噂を聞いていて「宅配部」の部長を知っていたあやは、たまたま出かけている部長に会い、依頼をしたそうなのだ。

どうやって写真を届けるか。手紙の書き方。そして、少しの遊び心も教えてもらった。

小学生のあやは最近パソコンの授業が

あつたそうで。まだローマ字ではなく、ひらがな打ちだったそうだが。

ところで、お気づきだろうか。

ロッカー番号37

37をひらがな打ちでうってみると、答えが出てくる訳だ。

「あや」

と、おじいちゃん思いの小さな女の子の名前が。

木下中学校 宅配部

校内宅配します（休日は出張宅配も）

忙しい人もそうでない人も是非、来てください。

責任をもって届けさせていただきます。

ちなみに、新入部員随時募集中。

詳しくは、第三準備室まで。